

あると思います。こうした初期の子どもの様子には、玩具が子どもたちにとって気持ちの安定のために大きな役割を果たしているといえます。子どもたちが安心して遊ぶことの出来るような玩具を充分用意することが必要となっています。

しかし入園初期には、まだどの子どもがどの玩具が好きなのか保育者にもつかめていません。この年令のこの時期にはこの玩具で遊ぶのではないかという予想をもって保育環境を整えておきますが、級によって遊びの好きな子どもが多いこともあれば、ままごと遊びが好きな級もあるし、予想とは異なることがあります。保育者は子どもたちの様子をよく見ながら、一人一人が落ちついて遊べるようになるまで、玩具の種類や数も多く用意し、自分の好きな物、好きな場所を見つけて安定していかれるようによく見守っていききたいものです。そして子どもたちの興味や関心のあり方によって、必要とされる玩具の数の増減や、種類の変化などを考え合わせながら保育環境を構成し、日々の保

育を進めていくことが大切であると思います。

やがて日を追い時が経つにつれ、はじめは玩具そのものとかかわりで遊んでいた子どもが、次第に友だちとの遊びに楽しさを感じるようになり、玩具はなかだち的存在になってくることもあります。玩具は友だち遊びへの有効な手がかりをとっています。充分遊べるだけあれば、もうこの時期には数はそんなに多くはいらないでしょう。遊びながら、友だちに貸して上げることも出来るようになってくるでしょうし、使いたくてもがまんすることも段々と覚えていくことでしょう。またそうなることが、大切な成長の姿なのです。次第に子どもたちの気持ちが安定して遊べるようになってきた折には、子どもの遊びの展開を考察しながら、不必要と思われるものを片づけたり、新しい刺激となるものを用意していくなどといった玩具についての見直しが必要な時期があります。

そして更に、子どもたちが園生活に充分慣れてくると、三歳児でも四歳児でも自分自身で遊びをつくり出

していくようになっていきます。この頃は最初の頃のようにすぐ遊び出せるような玩具よりも、遊びの素材となるような素朴な玩具を取り入れることが大きな意味合いをもつものとなります。例えば砂場に木片を幾つか用意することで、その木片は自動車にもなるし、船にもなるし、川の流れを塞ぎ止める堤防にも見立てることが出来ます。自動車の形をした玩具はいつでも自動車でしょうが、素材である木片は変化自在に子どもたちの想像の世界に役立つものとして使われます。最近の子どもは玩具を大事にしないとか、すぐ気が移るなどという声もききますが、それは玩具のもっている内容によって、初めは魅力的に見えても一通りの使い方しか出来ないものだったとしたならば、ある程度使ったら見返らなくなるのは当然といえます。子どもは何事でも一つずつクリアして乗り越えていくのですから、自分の考えや、工夫を入れる余地がないとか、それ以上のものが生まれてこないと思えばいつまでもそれにとりついていないと思います。

しかし、自分のイメージインジョンによっていくらかでも作り変えたり、想像を膨らませていけるものや、友だちとかかわって工夫しながら創り出していけるようなもの、即ち活動そのものを展開させていける材料には子どもの心は注がれます。街には高価な美しい玩具があふれていますが、幼稚園や保育園には素朴な玩具、いくら使ってもこわれにくい丈夫なもの、組み合わせさせて変化させていくことの出来る素材などを、環境として多く用意したいと思います。子どもが見たて遊びをすることの出来る素材的玩具を扱うことによつて、自分の発想や工夫を取り入れながら、主体的に遊びを展開させていくことが出来るのだと思います。こうしたものがあり、子どもの気持ちを保育者も共感したり承認したりしていくならば、子どもは考えて遊び、工夫して遊び、想像して遊ぶという遊びの原点ともいえるものが育ち、遊びを通して子ども自身も育っていくことと思います。子どもの成長に合わせて、今一度玩具について考えていくことが、保育者として保

育環境を再構成することにもなってくると思います。

こうして遊びこんできた子どもたちはやがて四歳後半から五歳頃になると、交友関係が深まってくるとともに、目的をもって生活を展開するようになっていきます。昨日から今日への連続の中で、自分たちの遊びに必要なものをつくり出し、自分の考えていることが実現出来る方向に活動を展開させたいという気持ちをもちようになります。例えば基地ごっこに必要な大型積木でつくったバリア、紙を丸めてつくった武器、あるいは何人かで共同して組み立てた大きな段ボール箱の乗物など、遊びを盛り上げていくのに大きな活躍を見せています。もうこの頃は最初の頃のような既製の玩具にはあまりひかれませんが、見かけはつたなくとも自分たちでつくった遊びに必要な玩具こそが、子ども自身にとって最も価値のあるものとなります。それをつくり出した満足感、充実感もきつと大きいことと思います。保育者は子どもが考えていることが実現出来るような材料や用具を用意したり、多くの援助や働き

かけをするなどによって、遊びをより楽しく豊かにする源を子どもとともにつくっていくことに、十分な時間とエネルギーを注ぎ入れていきたいと思っています。

このように考えてきますと、幼稚園の三歳四歳五歳の間に遊びの種類も内容も変化し、目ざましい成長を見せますが、玩具自体の種類も内容もその存在も大きく変化しています。同じ幼稚園生活であっても、年齢により、時期により十分な配慮や工夫が必要なのは当然といえます。考えたり工夫したり出来る子ども、友だちと協力出来る子ども、健全な心で遊べる子どもに育ってほしいと願いながら、そのために多くの影響を与える玩具についてより望ましいものは何かを考えていくことが大切だと思います。

例えば積木遊びを例にとってみても、三歳の一学期頃には友だちがつくって積み上げていたものを壊す子どもがいたりします。外側から見るとせっかく遊んでいたのに思いがちになります。若しかしたらその子どもは壊すという行動をしながら友だちとのかかわ

りを持つとうとしているのかもしれない。こう考えればその行為を止めるより先に、壊してももう一度つくりかえることの出来るもの、それ自体がこわれてしまわないもの、そして大事なことは友だちに当たったりしても危なくないものなどということに配慮しながら、保育環境としての玩具を用意することが肝要となってくると思います。そして壊したことを叱ったりとめたりするのでなく、その玩具をなかだちとして友だちとのつながりを持つ方向へと進めていくことが出来るように、保育者自身前向きな気持ちを持ち、環境を通しての教育や、子ども同士のかかわりを考えていくことなどが大切なのだと思います。

来年度の新教育要領の実施を目前にして、環境を通して行う教育を考えると、子どもが環境とかかわっ

ていきいきとした生活を展開していくために、発達の

時期に即した環境、玩具のあり方を再検討していくことも子ども保育者にとつての課題となつてくると思います。なおまた、忘れてはならないことは幼稚園の年令段階では子どもの一人一人の発達や興味の個人差が大きいので、年令とか時期などを考える以上に重要視しなければならぬのは、一人一人の子どもの発達や興味によく合った玩具が必要なのだという事です。こういったものがある中で、それらを使って思う存分遊びこんでいけるような場があり、またそれに加えて多くの有意義なものを合わせもつた環境があることが、子どもをよりよく伸ばす上に役立つことは明らかなことといえると思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

〈ままごと道具〉考

—— インドネシアの場合 ——